

体 育 5年A組	サ ッ カ ー ～ 特性を楽しみゴールの感動を味わう ～	佐々木和哉
---------------------------	---	--------------

1. 単元について

(1) 単元設定の理由

サッカーは、ボール運動の中でよく取りあげられている運動である。ボールを主に足で扱いながらドリブルをしたり、パスをしたりしながらボールを運び、ゴールにシュートすることによって、得点を競い合う運動であり、主に足でボールを扱うということがサッカーの特質でもある。

サッカーは、ボールを蹴ったり、ドリブルをしたり、パスを出したり、もらったりすることで楽しさを感じる。これが、第一歩となり、シュートすることやゴールすることの楽しさや感動につながっていき、多くの子どもが自分も得点をしたいという願いをもつようになってくる。当然ではあるが、自分がゴールすれば、楽しくてうれしい。それは、ゴールすることが得点につながり、試合の結果にもつながっていくからである。しかし、自分だけではなく、チーム内の友達がゴールすれば、自分の場面とはちがった感動が生まれるときがある。これは、お互いに感動を共有するということであり、試合で、得点者のまわりに仲間が集まってくることから判断できる。

チームとして、この感動を味わうために、みんなといっしょに練習したり、お互いに励まし合ったりしながら練習していくのである。そして、練習の仕方を考えたり、チームの戦術や作戦を考えたりしながら、意識をより一層高めながら試合内容を考えていくのである。

だが、足でボールを扱うというサッカーの特質を生活であまり体験していないことから、サッカーに対する苦手意識を持っている子どももいる。この意識から、自分から進んでボールを蹴りにいこうとしなくなり、運動量が少なくなってしまう、サッカーの楽しさや感動にふれる機会が少なくなってしまうことがある。また、試合をしていくと、まわりの気持ちを考えずに自分の思いだけでボールを蹴ったり、ドリブルをしたりする場面がでてくる。このようなことから、まわりの子どもの意識が高まらず、しらけた雰囲気になってしまい、楽しさを感じる子どもが少なくなってしまう、チームの意識も高まらない。

高学年になってくると、個人の気持ちの持ち方やまわりの友人関係等によって、自分の気持ちを表に出すことができないことがあり、それによって埋没してしまい、積極的に取り組めない場合がある。しかし、本単元では、子ども一人ひとりがサッカーの特性にふれることを重要視し、そこからボールを蹴ったり、ドリブルをしたり、パスを出したり、もらったりすることを楽しむことを第一歩として、シュートすることの楽しさを味わわせたかった。

このシュートすることの楽しさを出発点として、そこからつながっていくゴールの感動を子ども一人ひとりやチーム全員に味わわせたいと考えたので、本単元を設定したのであった。

(2) 単元目標

◎自分から進んでボールを蹴り、サッカーの楽しさを味わいながら、ゴールの感動をチームの仲間と味わおうとする。失敗を認めあえる雰囲気を大切にしながら、相手チームに勝ちたいという願いを実現させようと、チームの仲間と考えたり、いっしょに練習したりすることができる。

- ・チームの仲間といっしょに、練習や試合を積極的にしようとする。
- ・失敗にもめげず力いっぱい活動する。
- ・相手チームにあわせた戦術を考えたり、チームの仲間のよいところや反省点などに気づいたりする。
- ・自分の近くにあるボールを進んで蹴ることができたり、ドリブルをしたり、パスを出したり、もらったりする。

(3) 単元計画

①単元のねらい

ねらい1

◎チームのメンバーやルール、試合になれながらゲームを楽しむ。

- ・自分から進んでボールを蹴ろうとし、チームの仲間とパスでボールをつなぎあう活動をしようとする。
- ・シュートをし、ゴールをしようとする。
- ・友達が失敗しても、互いに励ましの声をかけようとする。
- ・試合で困ったことやうまくいかなかったことに気づく。

ねらい2

◎チームが勝つために、練習したり、戦術を考えたりしながら、チームの仲間や相手チームの子どもといっしょに、ゲームを楽しむ。

- ・チームでパスをしたり、シュートしたり、積極的に声をだしたりする。
- ・ゴールの感動をチームで味わおうとする。
- ・練習の仕方を考えたり、戦術を考えたりしている。
- ・試合で困ったことやうまくいかなかったことを個人やチームに生かそうとする。

②単元計画 (全9時間)

1	2	3	4	5	⑥	7	8	9
はじめ								
ねらい1			ねらい2					
								おわり

2. 単元の考察

(1)子どもが「意味と内容」をひろげた場面

本単元での「意味と内容」は以下のものであると考えた。

サッカーは、相手チームと勝敗を競い合うことを楽しむ運動であり、これが「意味」となる。しかし、これは、サッカーだけではなくボール運動全般に当てはまる。だから、勝敗をチームとしてよりよく競い合っていくことが、ひろがりとも考えられる。

「内容」は、チーム力を高めることとなる。この中に、技能を高めたりや人間関係をよくしたりということが含まれてくる。チーム力をより一層向上していくことがひろがりとも考えられる。

ボール運動全般で、「意味」が同じかといえばそうではなく、子どもたちにとっては、ちがったものになってくる場合もある。サッカーにおいては、シュートする楽しさやゴールの楽しさや感動を味わうからである。この感動を味わうということが「意味」にもなってくる。本単元においては、ゴールの感動をチームとして味わうことや、人間関係をよりよくしたり、技能を高めたりすることによって、チーム力をより一層ひろげていくことが、「意味と内容」をひろげるということになっていく。

本単元の実践を通して、子どもたちは以下のようになっていた。

生活経験からくる差はあるが、子どもたちは自分から進んでボールを蹴り、ドリブルをしたり、パスを出したり、パスをもらったり、シュートしたりしていた。これによって、特質にふれながらサッカーの楽しさや自分がシュートすることによって、ゴールの楽しさを十分に味わっていた。また、チームの仲間がゴールすると、いっしょにゴールの感動を味わっていた。新しいゴールの感動を味わうために、子どもたちは、チーム内で励まし合いながら、しっかりと練習したり、作戦や戦術を考えたりもしていた。また、ルールの工夫やボール操作の技術・攻守の戦術の工夫、チームワークやマナー等の人間関係の配慮によって、ゲームの楽しさもより深められていった。

このようなものが、子どもが「意味と内容」をひろげた場面である。

(2)互いのまなざしが共鳴するする実際の姿は

本単元で、子どもたちはシュートすることの楽しさを味わい、ゴールするとより一層の感動を味わっていた。そして、また次もゴールを決めたいという願いが強くなっていき、練習にも進んで取り組んでいた。

自分のゴールだけではなく、仲間がゴールしたときも集合して声をかけあうなどして、ゴールの感動をお互いに味わっていた。これによって、ゴールした子どもはまわりの友達に認められていると感じ、自信が出てきていた。このゴールが試合結果にもつながることから、また次もゴールを決めようという意欲も起きていた。個人の意欲の高まりが、チームとしての仲間意識をより一層高めることにつながり、相乗効果をもたらすことになった。

本単元では、一人のゴールの感動が、チーム全体の感動に広がっていった。この感動の広がりが、個人の活動意欲とチームの活動意欲を上げていくことにつながっていった。この高まりが、「互いのまなざしが共鳴する実際の姿」の場面であったととらえることができたと感じている。

3. 成果と課題

(1) 成果

今年度、「意味と内容」がひろがる学びの創造”のテーマをうけて，“運動の楽しさを真剣に学ぶには ～機能的特性と子どもからみた特性の関係をさぐる～”というテーマを設定して実践してきた。

子どもたちは、今年度サッカーだけではなく、いくつかのボール運動を経験し、それぞれの運動の特質にふれることによって、楽しみながら取り組んでいた。この運動の特質にふれることが機能的特性にふれるということになる。これと、今まで抱いていた考えが絡み合いながら学習が進んでいく。これが、機能的特性と子どもからみた特性との関係になってくる。本単元では、子どもたちは自分が持っている力を十分に発揮しながら学習に取り組んでおり、運動の楽しさを真剣に学んでいたと考えられる。このことが、成果と考えられる。

(2) 課題

今年度は、ボール運動を中心として研究テーマに取り組んできた。当然ではあるが、体育科の年間カリキュラムからすると、ボール運動だけではなく、他の領域の運動がある。しかし、今年度は、そこに研究の焦点をあまり当てていなかった。つまり、陸上運動や器械運動といった個人学習が中心の運動で「意味と内容」のひろがりや、互いのまなざしが共鳴する姿についての考察があまりできていないということになる。

学習では、めあてが必ずある。ボール運動等の集団で行う運動は、「個人のめあて」と「チームのめあて」のふたつが存在し、大切になってくる。しかし、個人で行う運動は主に「個人のめあて」が大切になってくる。それによって、「意味と内容」のひろがりや、互いのまなざしが共鳴する姿は必然的に変化するであろう。

個人学習にも焦点を当てていくことも、来年度の課題になってくると考えられる。

